

事業活動実績報告書

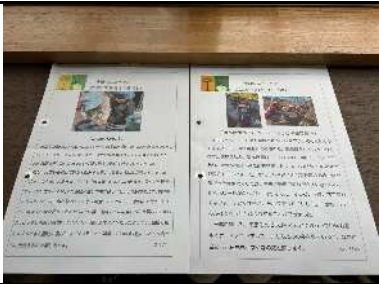
施設名	幼保連携型認定こども園すなはら
教育理念	「一人ひとりが主役になる」 ・自然の中で全身を使って五感を育む ・時間を忘れて遊ぶ ・赤ちゃんからお年寄りまで関わり合う生活 ・ほんものの食事
1 事業名	園庭に昆虫や生き物をよびこむための、ビオトープづくりとグリーンコーナーづくり
2 実施期間	令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日

3	取組概要	（取組日） 令和7年7月15日	
		（実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	
		第1回自然遊びワークショップ テーマ「ビオトープってなんだろう？」 まず、生き物が好む環境について講師から話があり、そこでビオトープの役割を教えてもらった。その後、既存のビオトープの中にいる生き物をじっくりと観察し、とても小さな生き物がいることを知った。	
		（取組日） 令和7年9月11日	
		（実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	
		第2回自然遊びワークショップ テーマ「虫のためのおうちを作ろう」 生き物が冬越しをするために虫のおうち（インセクトハウス）を作った。生き物が好む場所を作るために、枝や藁、竹を種類ごとに木枠内へ入れたり、家の土台を講師と一緒にトンカチを使用して完成させたりした。	
		（取組日） 令和7年10月15日	
		（実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	
		第3回自然遊びワークショップ テーマ「野鳥のための水飲み場・お風呂を作ろう」 より多くの野鳥に園庭を利用してもらえるように水場を作成した。野鳥が空から見つけられるように子どもと一緒に考えて設置場所を決めた。子どもは、支柱となる棒を打ち込むの手伝ったり、水道から水を汲んで水場となる大きな皿に水を足したりしていた。	
		（取組日） 令和8年1月20日	
		（実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	
		第4回自然遊びワークショップ テーマ「ビオトープ池のかいぼりをしよう」 ビオトープ池の水質改善のために、水を入れ替えたり、落ち葉や石などの不要なものを取り除いたりした。池の中は泥を使って坂になるようにすることで、外部から生き物が入りやすくなると講師に教えてもらった。	

3	取組概要	（取組日） 令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日 （実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 園庭生き物調査 毎月1～2回、1回2時間、園庭の生き物調査を実施。 調査員の方から園庭にいる生き物を教えてもらい、その生き物との関わり方を知る機会となっている。子どもや職員の視点だけでは見つけられない生き物に出会うこともあるため、子どもの方から調査員へ声を掛けるなど親交を深めている。 調査の内容は3月頃に集計をし、実施報告書として形にしている。	
		（取組日） 令和7年4月1日 ～ 令和7年9月30日 （実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること むしむしクラブ（前半） 4月「自然のビンゴで遊んでみよう」 5月「春の草花を使って遊んでみよう」 6月「園庭にいる生き物を観察してみよう」 7月「セミとセミの抜け殻を見つけよう」 8月「雑草が生い茂る中で生き物を探してみよう」 9月「鳴く虫とバッタを見つけよう」 春夏の生き物に出会った。猛暑が予想される日は、室内で標本を観察する等の活動に切り替えて実施した。	
		（取組日） 令和7年10月1日 ～ 令和8年3月31日 （実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること むしむしクラブ（後半） 10月「葉っぱを使って貼り絵をしよう」 11月「ドングリ工作をしよう」 12月「冬越しする虫を見つけよう」 1月「世界の昆虫標本展示会」 2月「自然のお弁当づくり」 3月「隠れている虫を探してみよう」 秋冬の生き物に出会った。講師が作った標本を見せてもらうことで知らない生き物に関わる機会となった。	
		（取組日） 令和7年5月8日 （実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 第1回畑の学校 活動内容「じゃがいもの観察」 葛飾区西水元で有機野菜を栽培する清水農園にて、野菜の栽培について様々なことを教えてもらう。第1回では、3月に植えたじゃがいもがどれほど成長しているのかを見に行った。その場でじゃがいもの絵を描き、生長を友だちや保育教諭と一緒に喜んだ。	
		（取組日） 令和7年6月10日 （実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 第2回畑の学校 活動内容「じゃがいもの収穫」 3月に栽培を始めたじゃがいもの収穫を行った。色が異なる2種類の種芋を植えたことで、普段食べているじゃがいもとの違いを感じ、言葉にして共有し合う姿があった。収穫したじゃがいもが園の給食で出てきた時には、色の違いに注目していた。	

3	取組概要	(取組日) 令和7年9月25日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 第3回畑の学校 活動内容「大根の種まき」 大根の栽培方法を2歳児の友だちに伝えるために、清水農園の清水さんへ尋ねに出かけた。植えた大根の種が水色とピンク色であることに驚いたり、大根が大きく育った後のことを想像したりして、胸を躍らせていた。活動後は、言葉と身体を使って大根の種まきの仕方を2歳児に伝えていた。	
		(取組日) 令和7年10月21日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 第4回畑の学校 活動内容「サツマイモの収穫」 1人1つの土嚢袋で栽培していたサツマイモを収穫した。それぞれ大きさや数が異なり、その違いを言葉にしながら収穫を楽しむ。収穫したサツマイモは子どもたちのアイデアで焼き芋にして食べるようになった。収穫に関わった人だけでなく、他の学年の友だちにも食べてもらおうと保育教諭と一緒に準備をした。	
		(取組日) 令和7年11月26日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 第5回畑の学校 活動内容「大根の収穫」 種から育てた大根を自分の手で収穫した。大きく育っており、子ども一人の力では抜けない大根もあった。そのため、友だちに声を掛けて2人以上で収穫する子もいた。リュックからはみ出るほどの大根であったが、帰園まで自分の力で運びきる姿が見られた。	
		(取組日) 令和7年11月18日 ～ 令和7年11月19日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 表現活動 畑の学校で知ったことを、劇遊びとして保護者や友だちに見せた。劇の中では、子どもが自分で考えた言葉を用いて、全身を使って表現をした。収穫したじゃがいもがハートの形だったことや、バスに乗る時の約束など、活動での出来事を振り返り、楽しみながら表現する姿が見られた。	
		(取組日) 令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 赤土、砂遊び 園庭のビオトープや生き物と触れ合う中で、赤土と砂にも興味を示す。赤土では、水をかけると滑りやすくなる性質に気づき全身を使って遊んだり、砂より成形しやすいため泥団子や泥温泉など、イメージしたものを形にしたりしていた。砂場では、ままごと遊びが展開されていた。ふるいをういて砂の中にある小石を取り除き、用途を変えて楽しんでいた。また、枯れ始めた花をままごとに利用することで、更に遊びが広がった。	

3	取組概要	(取組日) 令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 写真 子どもがiPadやiPhoneを使って写真を撮っている。子どもが撮りたいと思った瞬間を切り取り、友だちや保育教諭と共有できるようにした。写真があることで伝えたいことを言葉にしやすく、相手にも伝わりやすくなった。	
		(取組日) 令和7年10月9日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 粘土遊び、陶芸体験 赤土へ興味が広がったことで、粘土遊びと陶芸体験の機会を設けた。手足で粘土の感触を味わうことで、赤土とは違った気持ちよさを実感することができた。	
		(取組日) 令和7年4月1日～令和8年3月31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 版画活動 版画を用いて生き物や植物を表現した。園生活で出会ったものを振り返り、自分が好きなものを版画にして刷った。図鑑や絵本で本物をよく観察する姿があった。年長は、活動でお世話になった方へプレゼントするために、みんなで1つの版画を完成させた。	
		(取組日) 令和7年4月1日～令和8年3月31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 関さんの森 年長が、松戸にある関さんの森で年に10回程活動を行っている。活動場所では、スタッフの方が木や竹を切ったり、果物を取ったりしてくれている。その際、子どもがヘルメットを着用できるよう、活動内容によって持っていくようにしている。	
		(取組日) 令和7年4月1日～令和8年3月31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 観察活動 園庭で見つけた生き物や植物を鮮明に観察できるように、電子黒板と書画カメラを活用している。今まで虫眼鏡を使用していたが、それ以上に細かく観察ができるため、子どもが生き物の特徴に気づきやすくなった。また、観察したものを絵に描いて表現した。	

3	取組概要	(取組日)通年	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 葉新聞 園外活動後に、活動の内容をまとめた壁新聞を作成している。壁新聞では、文字や写真を用いる他、子どもが描いた絵を貼っている。子どもたちは、その日の活動で最も印象的なものを描き、活動の振り返りの機会にもなっている。壁新聞は、登降園で目にする場所に掲示し、保護者が見られるようにしている。	
		(取組日)通年	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること ニュートン 保育教諭が、子どもたちの様子やその時の発見・気づきを文章と写真を用いて記録している。これは、保護者が閲覧できるよう玄関付近に掲示すると共に、園のホームページにも掲載している。	

効果検証報告書（継続事業用）

施設名	幼保連携型認定こども園すなはら
教育理念	「一人ひとりが主役になる」 ・自然の中で全身を使って五感を育む ・時間を忘れて遊ぶ ・赤ちゃんからお年寄りまで関わり合う生活 ・ほんものの食事

計画時	事業の区分(5領域)		幼稚園教育要領に示された5領域に該当するもの(複数可。最も当てはまるものには◎を選択してください)									
			健康	○	人間関係	○	環境	◎	言葉	○	表現	○
	1 事業名		園庭に昆虫や生き物をよびこむための、ビオトープづくりとグリーンコーナーづくり									
	2 事業概要		前年度作ったビオトープ池をさらに生き物が来るような環境に変えていき、自然を活用した幼児教育を実践する。									
	3 対象学級(クラス名) 対象人数		幼児クラス(3、4、5歳児)(クラス名: 幼児クラス)							60 名		
計画時	4 実施体制		取組に必要な環境(人員、事業の遂行に必要な技能やノウハウ等)の保有状況									
			・「自然遊びワークショップ」:生態計画研究所 ・「園庭生き物調査」「むしむしクラブ」:NPO法人水元ネイチャークラブプロジェクト 中島幸一 ・「畑の学校」:清水農園 ・「関さんの森の日」:関さんの森を育む会 ・「粘土遊び」「陶芸体験」:草来舎 ・「植栽」:弥生造園									
事業後	事業後	4についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等									
			それぞれの分野に詳しい方々と交流することで、子どもや職員は新しい発見に触れ、未知の領域に挑戦する機会を得ています。知識が増えるほど「もっと知りたい」という意欲が旺盛になり、好奇心が学習の原動力として機能します。実際には、図鑑を手にとって自ら調べる姿勢が見られたり、講師や職員に直接質問をして理解を深めようとする場面が増えています。多様な専門家との関わりは、学びを深めるだけでなく、子どもと職員双方の学習意欲を持続させる重要な推進力となっています。今後も、図鑑や専門家の知識を活用した探究活動を通じて、より深い理解と自立的な学習を促していくことが期待されます。									
計画時	事業後	5 事業のねらい	・身近な自然の中で生き物や植物との不思議な出会いを通して、健康で豊かな人間が育つ。また、ビオトープの活用を日常的に行うことで、生き物の命の大切さや生育環境への興味が広がり、道徳性や思考力の芽生えが育まれる。									
			・身近な自然の中で生き物や植物との不思議な出会いを通して、健康で豊かな人間が育つ。また、ビオトープの活用を日常的に行うことで、生き物の命の大切さや生育環境への興味が広がり、道徳性や思考力の芽生えが育まれる。									

計画時	事業後	5)についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 ビオトープ池に関する気づきを記録するようにしたことで、興味関心が継続し、子どもの方からビオトープを気にかける発言が見られるようになった。また、虫の家や鳥の水飲み場については、子どもが講師と共に設置したため、満足感や、設置物に対する責任感の芽生えへ繋がっている。3月に入り暖かくなってくると、鳩がビオトープ池の水を飲んでいる場面を子どもと一緒に目撃した。鳥が園庭を利用することが増え、子どもたちの興味が鳥に向かっている。3月時点では、鳥の観察日記を始め、絵や文字を使って記録をしている。
	6 取組の内容		計画スケジュールを含む詳細な取組内容、経験させたい内容等 ・「自然遊びワークショップ」年4回 ・「園庭生き物調査」月1～2回 ・「関さんの森の日」年10回 ・「むしむしクラブ」月1回 ・「畑の学校」年5回 ・「にこにこ会（表現活動）」2回、日常の中で随時 上記のうち、幼稚園教育要領に示された「内容」について、各園で積み重ねてきた取組を発展させた点 ・環境の領域の『身近な環境に自らかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。』という「ねらい」に即し、『身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする。』という内容について、本園ではビオトープ池づくりを通じて、生き物が誕生することやよびこむことの難しさを感じ、生き物を大切にできるようにする。また、その難しさを友だちや職員と共有し合い、解決策を見つけようとする。さらに生き物への興味は広がるように、子どもが自然観察の専門員と話ができる機会を作ったり、図鑑や絵本、資料を用意したりして発展させた。 (継続事業のみ記入)前年度の取組から発展させた点 ・過去2年間にわたってビオトープ池や生き物をよびこむ活動をしてきたが、今年度は以前とは異なるやり方でより多くの生き物をよびこもうとしている。ビオトープ池の周辺に生き物が暮らせる場所を作ったり、池の水質改善を行うことその他、たくさんの野鳥が園庭を訪れるように水飲み場を設置する。
	事業後	6)についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 虫の家は、現時点では生き物が利用した形跡はない。しかし、設置1か月後、その隣に蛾の幼虫がいるのを発見し、子どもは盛り上がっていた。虫の家を利用したのではないかと推測により、子どもが虫の家に興味を示し、様子を見る姿が増えた。 鳥の水飲み場は、周辺に鳥のフンが落ちていることから、鳥が利用していることが分かった。実際に鳥が水を飲んでいる場面を確認できていないが、それはなぜか子どもと話し合った際に、静かな環境ではないことが理由として挙げられた。その後、子どもたちは鳥を見つけると、静かになりじっくりと観察するようになった。 園庭で生き物を見る場面が増えている。そうした効果から、子どもが更に興味を示し、観察や探求に意欲的に取り組む姿に繋がっている。
計画時	7 環境構成例		・ビオトープとグリーンコーナーづくりに対して継続的な関わりができるように、職員が子どもに声を掛けたり、それぞれの状況を子どもと見に行ったりする。そして、どのように変化しているのか言葉や文字にして伝え合う。 ・自然遊びワークショップは地域資源を活用し、園内と近隣の公園等で実施する。講師が午前中の主活動から昼食まで子どもたちと関わり、食事を子どもとともにすることで、活動を振り返ったり、疑問を投げかけられるようにする。午後は、職員が午前中の活動を振り返り、知識を深められるように園内研修を行う。

計画時	事業後	事業実績から推測される効果や改善点等 ビオトープ池のかいぼり後、子どもから水位が下がっていることや落ち葉が入っていることを教えてくれるようになった。自分たちで水質改善のための活動を行ったことで、ビオトープ池にとって良い環境を知り、それに近づけようとする姿がある。また、日常の遊びの中で、ビオトープ池やグリーンコーナーの話題を出すと、思い出したようにすぐに様子を見に行く。継続的に様子を見ているため、前回との変化に気づきやすく、それを言葉にして友だちや保育教諭に伝えていた。 講師と共に食事をとることで、子どもの疑問をその場で解決できた。そうした活動時間以外での関わりもあり、子どもたちが講師と関係を深められた。
	8 期待される効果 児童の姿	取組を通じて期待される児童の姿や効果等 ・身近な自然の中で生き物や植物との不思議な出会いを通して、健康で心豊かな人間が育つ。また、ビオトープの活用を日常的に行うことで、生き物の命の大切さや生育環境への興味が広がり、道徳性や思考力の芽生えが育まれる。 ・地域資源を活用することで、自分が暮らす周辺地域のことを知り、自園だけでなくその地域の自然も大切にしようとする。また、自然と人との共生や生物多様性への興味が芽生える。 ・ビオトープ池やグリーンコーナーの変化に気づき疑問を持ったり、職員と試行錯誤したりして考える経験を日常的に行う。 ・ビオトープの記録を行うことで、子どもが自然と文字や数量に興味を持ち、知ろうとする気持ちが芽生える。 ・様々な表現活動を通してインプットしたことをアウトプットする表現の場を用意することで、子ども一人ひとりが主役になる。
	事業後	事業実績から推測される効果や改善点等 表現活動の場では、自分が知っていることを自信を持って発表する姿が見られた。実体験が結び付いているため、言葉にしやすかったと考える。また、家庭でも園と同じ話題を話しているようで、保護者と園とで保育内容の共有にもなったと感じる。 園内に草花が増えたことで、綺麗に咲く花に目を向けるようになった。目に入ると、花の色や大きさ等に注目をして話をしていた。1人1つ育てているチューリップは、大きく育つように水をあげたり、どれほど育ったのか期待感をもって見に行ったりしていた。
	9 効果検証総括	事業を通しての感想、今後の教育・保育に向けて 生き物との接触を教育保育の柱として位置づけることで、子どもたちの観察力や探究心が芽生え、主体的な学びへとつながっています。特に、年少児が自然遊びワークショップに参加し、自ら目標を設定して達成する経験を積んだことは、大きな転換点となりました。達成感と責任感を得たことで、日常の遊びや学習活動に対する姿勢が自信に満ちたものへと変化しています。 また、畑の学校の活動を通じて、土や植物についての知識を蓄える場が整備され、知識を周囲の人に自信を持って伝えられるようになる成長も見られました。こうした知識の伝達は、仲間同士の協働を促し、学びの循環を生み出しています。 さらに、子どもが興味を持ったテーマを広げるため、保育内容の工夫を進めてきたことが、遊びの継続性を高める要因となっています。具体的には、観察・実験・表現活動を組み合わせた環境づくりや、自然観察の教材配置、体験型の課題設定などを取り入れることで、遊びが途切れず長期的に展開できるよう工夫しました

※必要に応じて、別紙の添付やイラストの活用などにより事業説明を補足しても構いません(別紙は任意様式)。

※幼保連携型認定こども園教育・保育要領における教育のねらいや内容等については、幼稚園教育要領の5領域から構成されていることを踏まえ、本事業では「幼稚園教育要領」とのみ記載しています。